



Data 2023-66

監督: 高橋正弥
脚本: 及川章太郎
原作: 河林満『渇水』
企画プロデュース: 白石和彌
出演: 生田斗真/門脇麦/磯村勇斗
/山崎七海/柚穂/宮藤官九郎/池田成志/尾野真千子

👁️👁️ みどころ

近時の日本は“水害列島”化しているが、30数年前の芥川賞の候補作『渇水』のテーマは、日照り続きの中での停水執行！それを映画化した本作の主役として登場する水道局職員、岩切（生田斗真）の心の中の“渇き”とは？

同時期に見た『波紋』（23年）は緑命会なる新興宗教が売り物とする“緑命水”をはじめ、“水の匂い”が満載だったが、本作はその逆。もっとも、岩切には“水の匂いがする”そうだが、それって一体ナニ？

母親からネグレクトされた幼い姉妹と岩切との交流はある日、思いがけない“反乱”を生むが、その“効用”をあなたはどうか考える？さらに、本作とは枝裕和監督の『怪物』（23年）、荻上直子監督の『波紋』との比較対照は？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■なぜ今、30数年前の芥川賞候補小説が映画に？■□■

本が売れなくなった今の時代でも、芥川賞や直木賞さらには本屋大賞等を受賞すれば羽が私が入学した1967年当時の話題書は1964年の芥川賞受賞作たる柴田翔の『されどわれらが日々』だったが、河林満が書いた小説『渇水』は1990年の第103回芥川賞の候補作。文学賞受賞作がすべて映画化されるわけではないが、高橋正弥監督はなぜ今、そんな原作をネタに選んだの？また、『凶悪』（13年）（『シネマ31』195頁）、『孤狼の血』（18年）（『シネマ42』33頁）等で有名な白石和彌監督が、なぜ本作をプロデュースしたの？

地球温暖化の危機が叫ばれて久しいが、その影響を受けて日本列島も次第に春と秋が短くなり、四季ではなく、極端に言えば夏と冬の「二季」になりつつある。5月末に梅雨入りした今年の日本列島は6月2日、台風2号の影響を受けて至るところで水害や土砂災害が発生した。『渇水』と題された本作は、日照りが続き、県内全域に給水制限が発令された

某都市を舞台に展開される、“停水執行”を巡る人間模様を描いたものだが、私の独断と偏見によれば、『渇水』が芥川賞候補となった1990年以降の平成の時代には、日照り続きの給水制限という経験は少なく、逆に台風や水害の経験の方が多い。2023年の今年もそうだが、なぜそんな今、高橋監督と白石プロデューサーは『渇水』の映画化を？

■□■水道事業とは？停水執行とは？その法的根拠は？■□■

上水道の整備は近代国家建設に不可欠なさまざまなインフラ整備事業の1つだが、電気の供給以上に市民生活に最も身近で不可欠なものだ。そのため、法治国家たる日本には水道法がある。水道法第3条は、「この法律において「水道事業者」とは第6条第1項により厚生労働大臣の認可を受けて水道事業を経営する者をいう。」と定めている。他方、地方公営企業法は第2条で、「この法律は、地方公共団体の経営する企業のうち、水道事業（簡易水道事業を除く）に適用する。」と定めている。次に、水道法第14条は「水道事業者は、料金、給水装置工事の費用の負担区分その他の供給条件について、供給規定を定めなければならない。」と定め、第15条第1項は「水道事業者は、事業計画に定める給水区域内の需要者から給水契約の申込みを受けたときは、正当の理由がなければ、これを拒んではならない。」と、水道事業者の給水義務を定めている。

他方、水道法第15条第3項は、「水道事業者は、当該水道により給水を受ける者が料金を支払わないとき、正当な理由なしに給水装置の検査を拒んだとき、その他正当な理由があるときは、前項本文の規定にかかわらず、その理由が継続する間、供給規定の定めるところにより、その者に対する給水を停止することができる。」と定めている。そして、水道法第15条第3項や条例に基づく「給水停止規定」では、概ね①督促状発送、②催告状発送、③給水停止予告通知書の送達を経て、④給水停止の手続きを定めている。

本作を評論するについては、まず、そんな水道事業と停水執行の法的根拠を明確にすることが不可欠だが、それに触れた評論はほとんどないため、弁護士兼映画評論家である私はまず最初にそれを明確にしておきたい。

■□■停水執行の担い手は市の水道局職員。その心の渇きは？■□■

私は弁護士登録10年目頃から、破産法が定める破産管財人の事件をたくさん受任した。破産管財人に就任した後の最初の仕事は、破産者の自宅や会社に赴いての“破産封印”だが、それを現実に執行するのは執行官だ。それに対して、「給水停止規定」に基づいて給水停止を現実に執行するのは誰？

それは、多分映画史上はじめて登場したと思われる、水道事業者である市の水道局の職員、岩切俊作（生田斗真）やその同僚の木田拓次（磯村勇斗）たちだ。2人は今日も佐々木課長（池田成志）に今日の停水執行予定件数を報告した後、車に乗って停水執行に出発したが、停水執行の担い手たる彼らの仕事への熱意は？

破産法に根拠を持つ破産管財人は大きな権限を持ち、後見的立場にある裁判所の許可を得ながら粛々と破産事件を処理していくが、私は常にその仕事に誇りを持って取り組んで

きた。それに対して、本作に見る岩切や木田の仕事ぶりには熱意や意欲が感じられない上、伏見（宮藤官九郎）のように、最終的に停水執行まで行き着く水道料金滞納者に対する督促、催告、料金徴収の仕事を嫌悪する職員も多いらしいが、それは一体なぜ？佐々木課長は“紋切り型”の励まし文句を並べ、岩切も表面上はそれに同調しているが、その本心は？『渇水』とは水の渇きだが、伏見はもとより岩切や木田の心の中の“渇き”とは？

■□■滞納者の生態あれこれ。この母親はひどすぎ！■□■

弁護士業務を50年近くやってきた中で私がつくづく思うのは、第1に人間の生態には色々あること、第2にどんなけしからんと思う奴（どんな悪い奴）でも必ず何らかの言い分があるということだ。したがって、弁護士の最大の任務は、そんなギリギリの人間の言い分を聞き取り、理解した上で、それをどんな形で主張していくのがベストかを選択することになる、と私は考えている。

本作には前述した伏見の他、今西（宮世琉弥）、坂上（吉澤健）という2人の水道料金滞納者が登場し、岩切に対してそれぞれの言い分を展開するが、彼らのそれは想定範囲内。しかし、私の大好きな美人女優、門脇麦扮する小出有希の水道料金滞納についての態度、対応は到底納得できるものではない。しっかり者の姉・小出恵子（山崎七海）と天真爛漫な妹の小出久美子（柚保）は、母親が毎日家を空けているため2人で過ごす時間が多いようだが、彼女らの父親は一体どうしているの？有希との離婚は？養育費は？この母娘が住んでいるのは平家ながら一軒家だから固定資産税等もかかるはずだが、それらの支払いはどうなっているの？電気代は水道代より優先して支払っているの？そして、何よりきれいに化粧をし、きれいな服を着て出かけている有希は一体何の仕事をしているの？

たまたま有希の在宅中に滞納料金の督促に訪れた岩切は、怒りを我慢しながら有希に対して、「今回は待つが、次回には必ず停水執行をする」と宣言。その上で再度訪れてみると。

■□■岩切の妻子は？水の匂いとは？岩切と姉妹との交流は？■□■

去る5月27日に観た、荻上直子監督の『波紋』（23年）は、義父の介護や夫の蒸発をはじめとする、さまざま苦悩の中で“緑命会”なる新興宗教にハマってしまった一人の主婦の姿が思う存分に描かれていたが、そこでは緑命水のみならず、ありとあらゆるところで水がふんだんに使われていた。それに対して、本作は冒頭から日照りが続く中、停水執行業務を担当している岩切が節水意識の中、バスタブの中に溜め込んだ水を少しずつ庭の花にかけてやる程度しか水は登場しない。そんな岩切は毎日十数件の停水執行業務に励んでおり、遂にある日、あの恵子、久美子姉妹についても母親が戻ってこない中、停水執行を。もっともそこでは、木田に対してバスタブ、バケツ、ペットボトルなどに停水執行前にできるだけ多くの水を溜め込んでおくよう指示し、その作業に協力していたから、彼の人情味はなかなかのものだ。停水執行の基準は数値や形式で決められないから、どこで、誰に対して停水執行すべきかの判断は難しい。したがって、AIが進歩し、チャット GPT まで登場している昨今、停水執行のような業務は岩切のような市役所水道局の職員が担う

のではなく、AI やチャット GPT に任せの方がいいだろう。

それはともかく、本作は一方で日々停水執行業務に従事する岩切の姿を描きつつ、他方で時々彼の私生活も登場させるので、それにも注目！それによると、岩切の妻の和美（尾野真千子）は一人息子と共に別居しているらしいが、それは一体なぜ？

一度、停水執行をしまえば、料金が支払われるまではそれが継続するから、途中で経過観察する必要はない。しかし、岩切の心中には、どこかで母親がいないまま、あの家で暮らしている恵子、久美子姉妹が気になっていたようだ。そのため、本作中盤では、自分自身の夫婦問題、子供問題に大きな悩みを抱えている岩切が、さまざまな形で恵子、久美子姉妹と接点を持つストーリーが大きなポイントになってくるので、それに注目！ちなみに、「夫がスエズ運河に行っている」と語る有希は、岩切に対して、「水の匂いがする」と語っていたが、それって本当？また、水の匂いって一体どんなもの？雨の気配や雨の匂いなら私にもわかるが、人間の身体に水の匂いってするものなの？

■□■本作 VS 『怪物』 VS 『波紋』。その評価に注目■□■

キネマ旬報 6 月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」は、たまたま同じような問題提起作となった(?) 荻上直子監督の『波紋』、是枝裕和監督の『怪物』(23年)、そして『渇水』の3作について、井上淳一氏、古賀重樹氏、服部香穂里氏の3氏がレビューしている。そこで私が注目したのは、古賀氏はすべて星4つ、服部氏はすべて星3つとしているのに対し、井上氏の評価が『波紋』と『怪物』については星1つで酷評しているのに対し、『渇水』は星5つで絶賛していることだ。それは一体なぜ？映画は見る人によって、また映画評論家の主観(感性)によって、これほど評価が違うということを思い知らされたが、さてあなたのこの3作への評価は？

日照りが続く中、雨への渴望が強まるのは当然だが、それ以上の問題は、人間の心の中の“渇き”もどんどん膨らんでいることだ。本作では、導入部から終盤にかけて次第に岩切の停水執行業務に対する疑問(怒り?)が大きくなっていく姿、すなわち、彼の心の中の“渇き”が拡大していく姿が描かれる。AIならそんな事態になることはないが、これこそ人間なればこそその実態なのだ。

しかして、本作後半では、心の渇きが頂点に達した岩切による“ある反乱”が描かれるので、それに注目！私が中学時代に観た『スパルタカス』(60年)では、スパルタカスが大規模な奴隷の反乱のリーダーとして活躍する姿が描かれていたが、その末路は期待とは正反対の敗北だった。スパルタカスですらそうだったのだから、法治国家のシステムががんにがらめに張り巡らされている今の日本において、水道局の一職員にすぎない岩切がある日突発的に“反乱”を起し、水道管からの水道水をまき散らしたとしても、それに一体何の意味があるの？誰でもそう思うはずだが、本作ではそれは意外にも人間の渇きを癒す上で大きな効果を発揮するので、それに注目！なるほど、なるほど。しかして、あなたの本作への評価は如何に？

2023(令和5)年6月8日記